

江尾の ごぜの森

昭和六十年十二月五日号



江尾の東名高速道路の南側に直径二十センチ、高さ十センチほどの雑木が密生した小山があります。地元の人はこちらを天狗の住む「ごぜの森」と呼び、今でも近づきません。今回は、この「ごぜの森」にまつわるお話です。

天狗の住む森

昔、京の帝をに駿河のごちそうを一足飛びに届けたという天狗が江尾の小さな森に住んでいました。

天狗は夜になると時々怒って、嵐のように木をゆさぶります。朝になって村の人がいつてみると、あんなにガサガサゆさぶったのに木の葉は一枚も落ちていませんでした。

また、あるとき村人の一人が、この森で草を刈ってきました。するとその晩、みすばらしい姿をした坊さんがやってきて、「今日刈った草を森へ返せ、返さないとたたりがあるぞ」

といつて帰りました。村人は気にもとめずにいると、間もなくその家に病人やけが人が次々に出て、思いがけない不幸が続きました。村人たちは、「あの森のただりに違いない」とうわさし、以来だれもこの森の草や木に手をつける者はなくなりました。

言い伝えでは、昔、この森に「ごぜ」（盲人で民家の軒先で歌つて歩く人）を葬つたから、ごぜの森というのだそうです。

草や木は今でも切らない

「ごぜの森」の南に住む後藤唯雄さんは、「ごぜの森の草や木を切る人は今でもいないよ。子供のころは、うっそうとした暗い森でとても怖いところだった。十歳ぐらいのとき、かくれんぼに夢中になり入ってしまったことが

あった。中には大きな石があつたよ」と語ってくれました。



今でもあまり人が入らないごぜの森